

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Affix Order and Postpositions in Hiri Motu : A Cross-Linguistic Survey

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崎山, 理 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004207

ヒリモトゥ語の類型：辞順と後置詞

——KWIC 資料に基づく通言語的研究——

崎 山 理*

Affix Order and Postpositions in Hiri Motu: A Cross-Linguistic Survey

Osamu SAKIYAMA

In this paper I compare certain postpositional particles in Hiri Motu and Japanese. Hiri Motu is one of the SOV type Austronesian languages, known as Austronesian Type II, which is spoken around Port Moresby, Papua New Guinea as the principal lingua franca. In particular I compare the use of Hiri Motu topic maker *be* and actor marker *ese* with Japanese postpositions *wa* (topic) and *ga* (nominative). The study is based on the language data from the Hiri Motu version of the New Testament (the Gospel), which has been made into the Key-Word-in-Context (KWIC) at the National Museum of Ethnology. In this text, *be* and *ese* are used up to 3,789 and 2,108 times, respectively.

Hiri Motu and Japanese apparently follow the same word order, i.e. SOV, but as far as the syntactic device is concerned, the affix order in Hiri Motu, i.e. sVo (s: subjective prefix, o: objective suffix) should be recognized as a distinct type of Japanese word order, reflecting anaphorically S and O within a sentence and forming a smallest sentence nucleus grammatically.

As the result of an exhaustive survey, the present paper points out that *be* in Hiri Motu is able to topicalize the whole elements including *ese* phrase in a sentence, such as ‘taunina *ese be* ... (the body-actor ...)’ (the only example: *Mat* vi. 25), ‘*daika be* ... (who ... ?)’ (9 examples: *Luk* ix. 46, etc.), being different from Japanese in that the chaining *ga* + *wa*, or interrogatives + *wa* is ungrammatical, by reason that the *ga*-marked subject expresses non-topic in opposition to the *wa*-marked topic, and

* 国立民族学博物館第5研究部

Key Words : Austronesian Type II, Japanese, word order, topicalization, implicit topic
キーワード : オーストロネシア語族2型, 日本語, 語順, 主題化, 転位陰題

interrogatives cannot be topicalized for their indefiniteness. Regarding this phenomenon, the chaining ‘... *ga* + interrogatives’ doesn’t occur in Japanese. This improbability is caused by the reason that the chaining ‘... *ga* + interrogatives’ presumes such an implicitly topicalized sentence as ‘(interrogative + *wa*) ... *ga* + interrogative’, and that, after all, the interrogative becomes topic.

What is interesting is that the combination ‘... *ese* + interrogative’ is unacceptable in Hiri Motu too, but this outward coincidence results from the different reason that the *ese*-marked actor semantically forms the exclusive relation with interrogatives in Hiri Motu, and it seems that the new tendency is appearing, rather focussing the actor in itself pragmatically, as seen in such a sentence ‘Tau *ese daika* ia dogoatao?’ (Whom [*daika*] is the man [*tau*] holding [*dogoatao*]?).

- | | |
|---------------------------------|-----------------------------|
| 1. ヒリモトゥ語の成立 | 4.1.1. 名詞・代名詞の後 |
| 2. ヒリモトゥ語の語順と辞順 | 4.1.1.1. 主題を示す用法 |
| 3. 後置詞の発生 | 4.1.1.2. 対比的とりたて用法 |
| 3.1. 後置詞 <i>ese</i> と <i>be</i> | 4.1.2. 名詞・代名詞以外の後 |
| 3.2. そのほかの後置詞 | 4.2. 行為者マーカー <i>ese</i> の用法 |
| 4. 主題化マーカーと行為者マーカー | 4.3. 主題化への補足 |
| 4.1. 主題化マーカー <i>be</i> の用法 | 5. まとめ |

1. ヒリモトゥ語の成立

ヒリモトゥ語 (Hiri Motu) はモトゥ語 (Motu) がビジン化した言語である。

モトゥ語は、パプアニューギニアの首都ポートモレスビーの、アジア大陸から渡来したモンゴロイド系モトゥ人の民族語で、現在、ハヌアバダ (Hanua Bada「大きい村」) 地区を中心に12の村で約1万5千人に話される。人びとの伝説によれば、民族移動はニューギニア島南側の沿岸添いに南東から北西に向け行われた [BELSHAW 1957: 11]。その正確な年代は不明であるが土器などに基づく考古学的調査では西暦8世紀ごろと推定される。この移動は、ニューギニア島北部をさらに東方のメラネシア、ポリネシア方面に向け移動していったオーストロネシア語族の一派が南下することにより行われた。

言語系統的にモトゥ語はオーストロネシア語族メラネシア語派パプアニューギニア

中央州諸語に分類される。この諸語は、パプア湾岸添いに西から東南にかけて Mekeo, Kuni, Roro, Kabadi, Doura (以上, 西群), Sinagoro, Hula, Keapara (以上, 東群) の各言語によって構成されるが、文法的に相互の差異は小さい。モトゥ語は語彙的に東西群の過程形を呈する。この諸語の特色は、見掛けの語順が SOV となる。Capell は、SVO をとるオーストロネシア語族を 1 型とし、それと区別して SOV をとるオーストロネシア語族を 2 型と名づけた [CAPELL 1976: 6]。このような 2 型が発生した理由として、先住民族であるパプア諸語の基層的影響を考えなければならない [崎山 1986]。

ピジン化したモトゥ語は、記録としては 19 世紀中葉にすでに成立していたことが報告され、パプア湾岸での交易、交渉用媒介言語として発達した。最初、その言語は、オーストラリア植民地時代に沿岸警備隊により治安のために利用されたので、ポリスモトゥ語 (Police Motu) と呼ばれた。ヒリモトゥ語というのは、この地域の沿岸でかつて定期的に行われていた伝統的取引 (hiri) の名をとってつけられた 1970 年以降の呼び名である [崎山 1993]。現在、その使用者は 10 万人以上に達し、使用者数と通用範囲では比較にならないがパプアニューギニアでトクピシン (Tok Pisin) につぐ第二の共通語となっている。ヒリモトゥ語の語彙の 9 割以上はモトゥ語の語彙を継承するが、音韻面、文法面では変化をこうむりピジン化現象一般としての簡素化、分析化がみられる [WURM 1964; 崎山 1992a, 1992b]。

2. ヒリモトゥ語の語順と辞順

ヒリモトゥ語の構造もモトゥ語を継承して SOV であるが、V には S, O と文法的に前方照応 (anaphora) した人称接辞が含まれ、基本的な文構造は S-O-sVo (または O-sVo-S) となる。このいわば「辞順」(affix order) sVo は、文法的構造的に安定した部分であり、文としての最小限の情報を含む小宇宙を形成する。この sVo はオーストロネシア語族に典型的な型でもあり、パプア諸語の多数派の辞順である oVs とは基本的に異なる。パプア諸語の基層的影響によって見掛けは 2 型に変化したものの、辞順までは浸染されなかったことになる [崎山 1986]。

したがって、Dutton and Voorhoeve のように、S に対し「名詞主語の文」、「名詞主語でない文」というようなカテゴリーを立てると誤解を生じやすい。たとえば、名詞が主語となる

Sisia ese boroma ia itaia. 「イス (sisia) がブタ (boroma) を見た (ita-)」

Sisia ese boroma idia itaia. 「イヌ（複数）がブタを見た」

（この文の sVo は、ia-ita-ia=he looks it と idia-ita-ia=they look it, ただし、現行の正書法では s, o にハイフンを入れない。しかし、そのために誤解が生じてはならない）が主語マーカー（subject marker）ese を伴った SOV となるのに対し、代名詞が主語となる

Boroma lau itaia. 「ブタを私（lau）は見た」

Boroma oi itaia. 「ブタを君（oi）は見た」

では OSV となり語順が変わる [DUTTON and VOORHOEVE 1974: 21]。

（この文の sVo は、lau-ita-ia=I look it と oi-ita-ia=you look it）

このような見方が現れるのは、文中の主語は一つとみなす西欧的文法概念の呪縛と S, O と s, o の機能についての明確な文法的定義がなされていないためと考えられる。ヒリモトゥ語がこのような SOV と OSV という変異をもつという説明に対し Thomason and Kaufman が普遍的類型論の観点から不審を表明しているのもけだし当然である [THOMASON and KAUFMAN 1988: 186]。

ようするに、文中において文法的（統語的）中核になるのはこの辞順部分であって、それ以外は談話的に付加される要素にすぎない。それは、文中での ese を伴う句の位置が

Tau ese hahine ia botaia. 「男（tau）が女（hahine）をぶった（bota-）」

のほか、語順として

Hahine ia botaia tau ese.

も普通に言えることから分かる [WURM and HARRIS 1963: 58]。

このようなことが起るのは、ese（あるいは se）が単なる文法的な主語のマーカーではなく、代名詞主語を強調する [WURM and HARRIS 1963: 8]、行為者が自らの責任である行為を行ったという事実を強調する [DUTTON and VOORHOEVE 1974: 90]、どれが主語でどれが行為を行った物かを標示する [BAURE 1978: 67-68] などと各様に説明されることから分かるように、行為者や行為を強調する機能をもつからである。ただし、

Tau ese ia mase. 「男（tau）が死んだ（mase）」

のように、「女」でなく「男」であることをとくに指示するためにも ese を用いることができるから、他動詞構文だけを意図したような Dutton and Voorhoeve の説明は事実合わない。

なお、O が複数の場合、-o は -dia をとるが、この原則はポートモレスビー（モト

族)では維持されるが、周辺地域ではさらにピジン化が起り、単数複数の区別を失って -ia に融合される傾向がある。しかし、この単数接尾辞 -ia を -a と切り、動詞語末母音が a- のときは i を挿入して -ia となる [DUTTON and VOORHOEVE 1974: 72-73] という説明はオーストロネシア語史の事実に合わない。-ia は原オーストロネシア語 *iya(h)「三人称単数代名詞」に由来するからである。むしろ、語末母音が a- 以外のとき i- を脱落させる (たとえば, utu-a: utu-dia「切る」) と分析すべきである。

3. 後置詞の発生

3.1. 後置詞 *ese* と *be*

SOV のヒリモトゥ語には、この *ese* のほか、いくつかの後置詞が発生している。まず *ese* に類する後置詞として、強調マーカー (marker of emphasis) [WURM and HARRIS 1963: 24], 焦点マーカー (focus marker) [DUTTON and VOORHOEVE 1974: 59-60] の *be* がある。上述の名詞主語文では

Sisia *be* boroma ia itaia.

も可能であり、また、代名詞主語文には

Lau *ese* boroma lau itaia.

Lau *be* boroma lau itaia.

も適格文となる。しかし、

Sisia boroma ia itaia.

は、適格ではあるが主語 ia が *sisia*, *boroma* のいずれと照応するのかが不明な曖昧文 (「ブタがイヌを」か「イヌがブタを」か) となる。

be と *ese* の違いは、これまでに十分明らかに説明されたとは言い難い。日本語と対照する限りにおいて、次のような例文の *be* と *ese* は、日本語「は」と「が」の使い分けに対応しているかにみえる。

(例1)

A Be! Oi *ese* oi pidia? 「わあ、君 (oi) がそれを射た (pidi-) のか」

B Lasi.Kakana *ese* ia pidia.Lau *be* tosi sibona lau dogoatao. 「いや、兄 (kakana) が射たのだ。私 (lau) は松明 (tosi) をかざしていた (dogoatao¹⁾)

1) dogoatao はモトゥ語 dogo-a+tao「固く保つ」という合成語に由来する不規則形で、語中の -a- は目的語接尾辞 (-o) の痕跡である。

だけ (sibona) だ」 [DUTTON and VOORHOEVE 1974: 81]

ここの *ese*, *be* の用法からは、機能的に *ese* が未知, *be* が既知を表すかにみえる。これについては、4.1.1.1.(1)(2) で述べる。

(例2)

Ia mase negana idia laloa *be* tau buruka *ese* meamea ia karaia. 「彼 (ia) が死んだ (mase) とき (negana) 彼ら (idia) が思った (laloa) ことは、老人 (tau buruka) が邪術 (meamea) を行った (kara-) と」 [DUTTON and VOORHOEVE 1974: 60]

この例は、4.1.2.(9) と同じものになる。

(例3)

A Daika ia herevahereva ?²⁾ 「誰 (daika) がしゃべっている (herevahereva) のか」

B Ia *ese*. 「彼 (ia) が (だ)」 [DUTTON and VOORHOEVE 1974: 91]

この例は、4.2.(10) として分類したのと同じ用法である。

(例4)

A Oiemu turana *be* edeseni ? 「君の友人はどこに (いるのか)」

B Ia *be* taraka vairanai ia helai. 「彼はトラックの前に座っている」

この例に関しては、4.3.(15) でさらに論じる。

3.2. そのほかの後置詞

そのほかにも後置詞あるいは後置詞的小辞として, *ataiai* 「(離れて) のうえ」, *badinai* 「のもと」, *badibadinai* 「のよこ」, *dainai* 「のため」, *dekenai* 「で(場所・手段・理由)」, に, から (英語では on, in, at, to, from, along, with, for, by)], *henunai* 「のした」, *huanai* 「のあいだ」, *lalonai* 「のなか」, *latanai* 「(密着して) のうえ」, *murinai* 「のうしろ」, *murimuri* 「のそと」, *neganai* 「するとき」, *totona* 「するため」, *vairanai* 「のまえ」 などがあるが、語形的に *ataiai*, *murimuri*, *totona* 以外はすべて *-na-i* (三人称接尾辞+指示詞) を含み、その起源は前方照応的 (anaphoric) な前置詞句として現れ後置詞へと移行したことが注目される。たとえば、

2) この文は *Daika ese ia herevahereva ?* ともいえる。同型の例文 *Daika ese ia dogoatao lau ?* (LUKE 8: 45) 「誰が私をつかんだのか」(この文の sVo は *ia-dogoatao-lau*) を参照せよ。

Boroma lau gwadaia io *dekenai*. 「ブタを私は槍 (io) で (*dekenai*) 突いた (gwada-)」

では, io *dekenai* 「槍で」は前方照応した形式「槍, それに依拠して (それによって)」に由来する。

これら後置詞句の構成は, 語根 (語幹) 部分の *badi(na)* 「基, 幹」, *hua(na)* 「真ん中」, *lalo(na)* 「内, 心」, *lata* 「長い」, *muri* 「外」, *nega* 「時」, *vaira(na)* 「前, 顔」には一方でまだ名詞や形容詞としての独立的用法もあるが, もっとも多機能の *dekenai* の *deke-* が語源的には「傍ら, 側」であるほかは, すでに語源的に不明となり後置詞として固定しているものも多い。次はまだ流動的な用法をもつ例である。

Murinai ia mai. 「あとから彼は来た」

Ruma murinai ia noho. 「家のうしろに彼はいる」

なお, *ese* の語源は音韻変化から原オーストロネシア語 **itu(h)* 「指示代名詞 (それ)」であり, *be* は間投詞 (例 1) の *be* と同語源である。日本語の「は」 (古形, 方言形 *ba*) も国語学では間投詞「わ」と同起源とみる説がある点で共通し興味深い。

ただし, これら後置詞 (接尾辞) についての研究は別の機会に譲る。

本稿では, 国立民族学博物館においてヒリモトゥ語の『新約聖書』 (*Taravatu Matamatana*, Published by The Bible Society of Papua New Guinea) の四福音書の全文を個人研究用言語資料としてコンピュータに入力し, KWIC (Key Word in Context) による文脈の検索が可能となったので, その膨大な資料に基づき, *be*, *ese* を日本語の「は」「が」と通言語学的に考察することによりその機能を分析する。

なお, 本 KWIC 資料における *be* の出現頻度数は3789回, *ese* は2108回である。用例によっては非常に多くの例文があるが, その場合はとくに頻度数を示さずそのなかから選択し掲げるに留める。

(グロスへの略号, AFF: Affirmative, CAUS: Causative, FUT: Future, IN: Inclusive, INT: Interjection, PL: Plural, PRES: Present, SG: Singular, TAG: Question TAG, VOC: Vocative)

4. 主題化マーカ―と行為者マーカ―

be と *ese* の機能には, それぞれ, 「は」「が」の機能と一見よく似てはいるが確実に相違がある。ことに, *sVo* のような構造をもたない現代日本語とは, 次元を異にする

問題点があることは当然、予想される。

上述のように *be* を焦点マーカーとみなす考え方がある。この場合、「主題」(topic)との区別が明らかでないが、オーストロネシア語的にいえば、インドネシア語派の台湾やフィリピン、ミクロネシアの諸言語に見出される、文中の行為者、受益者(間接目的語)、対象(直接目的語)、場所、道具などが特定化され、それと呼応して接辞法により動詞の語形変化も伴う形式が *focus* と呼ばれるのと *be* の用法とは、明らかに異なっている。以下では、*be* を主題化のマーカーとみなし、論を進める。

4.1. 主題化マーカー *be* の用法

4.1.1. 名詞・代名詞の後

4.1.1.1. 主題を示す用法

(1) 目的語標示

Bema oiemu vairana idiba kahana *be* tau ta ese botaia neganai, oiemu
 “if your face-of right side person one hit-it at the time, your
 vairana lauri kahana danu oi henia ia botaia *be* ia namo.
 face-of left side also you give-it he hit-it it good”
 ‘Whosoever smiteth thee on thy right cheek, turn to him the other also.’

(MATT 5: 39)

最初の *be* は目的語を標示するが、後の例(「君が彼をして打たせることが(それが良い)」は同格節を導く。そしてこの文から明白なように、*be* と「は」既知, *ese* と「が」未知の機能と並行しない。なお、ヒリモトゥ語には目的語標示のマーカーはない。

(2) 主語標示

Guba bona tanobada do idia boio, to lauegu hereva *be* do ia boio lasi.
 “sky and world later they lost, but my word FUT it lost not”
 ‘Heaven and earth shall pass away, but my words shall not pass away.’

(MATT 24: 35)

ただし、次は日本語で不可能(「*どれは」「*誰は」「*何は」「*どこは」)な用法である。

(3) 疑問詞の後

a. Matakepulu taudia e, edena *be* ia bada ? Boubou gauna ia bada, a ?
 “blind person-PL VOC, which it great ornament thing it great, INT

O sedira pata helaga, ia ese boubou gauna ia hahelagaia *be* ia bada ?
 or perhaps platform sacred, it ornament it CAUS-sacred-it it great”
 ‘Ye blind: for which is greater, the gift, or the altar that sanctifieth the gift ?’
 (MATT 23: 19)

b. Idia sibona idia hepapahuahu, *daika be* do ia bada.
 “they only they quarrel who FUT he great”
 ‘There arose a reasoning among them, which of them was the greatest.’
 (LUKE 9: 46)

c. Idia toiosi *daika be* dadia taudia ese idia haberoa tauna ena badibadi-
 “they three whom robber-PL they wounded person his side-
 nai tauna do ita gwauraia ?
 of person FUT we-IN speak of”
 ‘Which of these three, thinkest thou, proved neighbor unto him that fell among
 the robbers ?’
 (LUKE 10: 36)

機能的に a. b. は主語標示, c. は目的語標示の例である。またこのほか, *edena be* は五例, *daika be* は七例あるが, *dahaka be* と *edeseni be* は例がない。しかし, 疑問詞が *be* を伴わず主語または目的語となるとき, 次の例のようにその位置はかならずしも文頭に拘束されない。

Lauegu dabua *daika* ia dogoatao ?
 “my garment who he touch”
 ‘Who touched my garments ?’
 (MARK 5: 30)
 Oi be *dahaka* oi gwau ?
 “you-SG what say”
 ‘What are you talking about ?’³⁾
 (LUKE 10: 36)

4.1.1.2. 対比的とりたて用法

(4) 重複使用

日本語でも可能(「は…は」)で, 次の三例がある。

a. To haida *be* idia *be* idia laloa daradara.
 “but somebody they they think dubious”

3) この文は ‘thinkest thou’ と英訳されている。

‘But some doubted (them).’ (MATT 28: 17)

- b. Lauegu namo *be* dahaka *be* lauegu Lohiabada ena sinana *ese* lau dekenai
 “my happiness what! my Lord his mother me into
 ia vadivadi inai ?
 she visit here”

‘Whence is this to me, that the mother of my Lord should come unto me.’
 (LUKE 1: 43)

この例文の *dahaka be* は意味的に間投詞的用法（「何ということか」）となる。

- c. Haida *be* idia laloa Iuda *be* moni mauana ia naria dainai
 “somebody they think Judas money box he look after it by reason of
 Iesu *ese* ia hamaoroa,
 Jesus he tell”

‘Some thought, because Judas had the bag, that Jesus said unto him,’
 (JOHN 13: 29)

ただし、次は日本語で不可能（「*がは」）な用法となる。

（5）*ese* の後

ただし、用例は次の一例があるのみ。

- Mauri *be* gau badana, to aniani *be* gau maragi, ani ? Tauanina *ese be* dabua
 “life thing great, but food thing small, TAG body clothes
 ia hanaia, ani ?
 it surpass-it, TAG”

‘Is not the life more than the food, and the body than the raiment ?’
 (MATT 6: 25)

4.1.2. 名詞・代名詞以外の後

（6）後置詞（*dekenai*「で、に」、*huanai*「のあいだ」）の後

日本語においても「では、には、のあいだは」などが可能である。（7）（8）（9）
 についても同様である。

- a. Ia danu *be* hutuma bada, imadia *dekenai be* edia kaia bona au idia
 “it also crowd big, hand-their in their knife and wood they
 dogoatao.
 hold”

‘(Cometh Judas,) and with him a multitude with swords and staves.’

(MARK 14: 43)

b. Idia ruaosi *huanai be* daika *ese* henitorehai tauna do ia
 “they both among who give a thing on credit person FUT who
 lalokau henia bada ?
 delight in more”

‘Which of them therefore will love him most ?’ (LUKE 7: 42)

(7) 副詞の後

Kerukeru *be* nega do ia namo,
 “tomorrow time FUT it good”

‘It will be fair weather :’ (MATT 16: 2)

(8) 従節 (*neganai* 「するとき」) の後

Gohu unai kahana dekenai Iesu ia giroa lou *neganai be* taunimanima momo
 “lake there side toward Jesus he return at the time people many
ese idia abia dae mai moale danu,
 they accept TOWARD THE SPEAKER glad too”

‘As Jesus returned, the multitude welcomed him ;’ (LUKE 8: 40)

(9) 主節の後

Lau *ese* do lau henia aniani *be* lauegu tauanina,
 “I FUT I give-it food my body”

‘The bread which I will give is my flesh,’ (JOHN 6: 51)

4.2. 行為者マーカー *ese* の用法

行為者マーカー *ese* は、具体的に行為を行い得る有意志の名詞や人称代名詞のみならず、指示代名詞が行為者として比喩的に用いられることもある。次の *inai ese* 「これが」の「これ」は「先導する星」を指している。ただし、指示代名詞との共起例としては唯一である。

Inai hisiu, dina daekau kahana dekenai idia itaia gauna, *inai ese* ia
 “this star sun go up district in they look-it thing he
 hakaudia,
 guide-them”

‘the star, which they saw in the east, went before them,’ (MATT 2: 9)

(10) *ese* 止め

次の三例があるが、日本語では「が」で終止するのは普通でない。

- a. *Badina be taunimanima ese oi idia hadibaia lasi, to laegu*
 “because people you-SG they CAUS-know-it not, but my
Tamana guba dekenai ia noho ese.
 Father heaven in he stay at”
 ‘For flesh and blood hath not revealed it unto thee, but my Father who is in
 heaven.’ (MATT 16: 17)
- b. *Gau tamona Mose ese unai kara ia hamatamaia lasi, to iseda*
 “thing alike Moses that custom he CAUS-beginning-it not, but our-IN
guna sene taudia ese.
 old ancestor-PL”
 ‘(Circumcision) not that it is of Moses, but of the fathers.’ (JOHN 7: 22)
- c. A *Daika be edia tamana ena ura ia karaia ?*
 “who their father his wish he do-it”
 ‘Which of the two did the will of his father ?’
 B *Guna ia vara natuna ese.*
 “first he born child”
 ‘The first.’ (MATT 21: 31)

a. は「私の父で天にいるその人が」、b. は「われわれの昔の先祖たちが」、c. は「最初に生れた子である彼が」のような言い切り形である。

4.3. 主題化への補足

次に、日本語の二重主語文「は…が」との対照を試みる。

(11) 部分

- Idia ibounai be ta ese ia haere diba lasi ia dekenai.*
 “they all one he answer know not him to”
 ‘No one was able to answer him a word,’ (MATT 22: 46)

この例文は「彼らは皆、一人も（が）答えられなかった」であるが不自然であり、*be…ese* の組み合わせによるいわゆる「ゾウは鼻が長い」型の属性表現は不可能とい
 ってよい。

(12) 所有

Lau *be* mai egu adavana lasi.

“I with my spouse not”

‘I have no husband.’

(JOHN 4: 17)

Lau *be* adavana lasi,

‘He whom thou now hast is not thy husband :’

(JOHN 4: 18)

所有表現にはこのように mai「とともに，来る」を用いるより，noho「ある，存在する，滞在する」を用いる表現がより一般的である。

Lauegu adavana ia noho lasi.

“my spouse he exist not”

また，日本語の所有表現「に（は）…ある」と並行的な

Lau dekenai (*be*) adavana ia noho lasi.

のほうが普通である。本 KWIC 資料にも次の例がある。

Mauri hanaihanai herevadia *be* oi dekenai idia noho.

“life every day word-PL you in they”

‘Thou hast the words of eternal life.’

(JOHN 6: 68)

(13) 要求（好き嫌い）

Simona Iona e, lau oi lalokau henia, a ?

“Simon John VOC, me you-SG love give-it, INT”

‘Simon, son of John, lovest thou me ?’

(JOHN 21: 16)

これと次は，日本語の「が好きだ」「ができる」とは異なり，いずれも他動詞構文となる。

(14) 可能

Umui *be* umui ura taunimanima *ese* umui dekenai idia karaia hegeregerena

“you-PL want people to they do-it able to

umui danu inai bamona do umui karaia idia dekenai.

you-PL also this like FUT do-it them to”

‘As ye would that men should do to you, do ye also to them likewise.’

(LUKE 6: 31)

(15) 転位陰題

日本語の普通の文では，「*あの人が誰か」「*これが何か」と言うことはできない。（ただし，複文中では「私は，あの人が誰か知らない」が可能。）その理由は，「*（誰は）—あの人が誰か」のような疑問の語句が主題となっている転位陰題の文であるか

らである [佐治 1992: 44-45]。転位陰題とは、題述文における叙述部に主題となるべき語句が含まれているため、「は」を含む主題では表されない文に対し（故）三上章によって与えられた名称である。ヒリモトゥ語においても、

Tau *be edeseni* ia lao ? 「男 (tau) はどこへ行く (lao) の」

の *be* を *ese* で置き換えることはできない [BAURE 1978: 68]。本 KWIC 資料でも *be edena*, *be daika*, *be dahaka*, *be edeseni* は多くの用例があるが, *ese daika* 「誰」, *ese dahaka* 「何」, *ese edeseni* 「どこ」はまったく出現しないことから、ヒリモトゥ語でも ‘… *ese* + 疑問詞’ は非文法的である可能性がある。ただし、成句 *edena bamona* を伴う次の例は副詞的用法（「いかに（強くとも）」）である。

Tau ta *ese edena bamona* goada tauna ena ruma dekenai do

“person one how strong person his house into FUT

ia raka vareai,

he go enter”

‘How can one enter into the house of the strong man,’ (MATT 12: 29)

国立民族学博物館で個人研究用言語資料として『新約聖書』（*Buka Helaḡa*, Published by The Bible Society of Papua New Guinea）の四福音書の全文を入力したモトゥ語には ‘…*ese daika*’ が次の一例のみ得られる。

Hahediba na e heroḡa heheni, e daradara bada, ia *ese daika* e

“disciples they-AFF look each other, they doubt great, he whom he-AFF gwauraiamu.

speak of-PRES”

しかし、この文と対応するヒリモトゥ語文では次のように ‘…*be daika*’ である。

Diba tahua taudia *be* ta ta sibona dekenai idia itaia, idia lalao

“knowledge seek person-PL each by oneself they look-it, they think

daradara maragi lasi, ia *be daika* dekanai ia hereva.

confused little not, he whom about he talk”

‘The disciples looked one on another, doubting of whom he spake.’

(JOHN 13: 22)

モトゥ語の例文では *daika* が単文でなく複文中に埋め込まれているための用法（日本語でも「皆は、彼が誰のことを話しているのかと狼狽した」のように可能）かどうか、さらに検討を要する。

それにもかかわらず、

Hahine *ese daika* ia dogoatao ? 「女 (hahine) が誰をつかまえた (dogoatao) の」
[DUTTON and VOORHOEVE 1974: 23]

Tau *ese dahaka* ia negea ? 「男 (tau) が何を投げた (nege-) の」 [BAURE
1978: 69]

のような新しい (?) 表現 (この例文の *daika*, *dahaka* はいずれも目的語) も報告されているから、モトゥ人 (Baure) 自身にも混乱がみられることになる。

5. ま と め

以上の対照を通じて、ヒリモトゥ語と日本語では主題化の内容が異なることはすでに予想したとおりである。ここまで日本語の「は」を対照の便宜上、「主題化」の助詞として扱ってきたが、「は」は題述文において叙述部に対する前提として示される助詞、と定義されるものである (4.3.(15) 参照)。すなわち、ヒリモトゥ語の *be* は疑問詞を含め、文中のあらゆる要素を主題化し得るのに反し、「は」による主題化は叙述の前提として範囲の明確なものしか示すことができないから、たとえば「*どれは」「*誰は」が成り立たない。

一方、*ese* と「が」も主語を標示する機能において一見似てはいるが、*ese* は行為者をマークアウトするマーカーであり、それを *be* によってさらに主題化することも可能である (4.1.1.2.(5) 参照)。また、ヒリモトゥ語の辞順を中心とした、日本語との文法構造の違いによって、*ese* 句の文中での位置は自由になる (4.2.(10) 参照)。したがって、見掛けのうえでの「…*ese*「が」+疑問詞」を非文法的とするヒリモトゥ語と日本語に共通する原因は両言語で同じでない。日本語における、疑問詞が主題となっている (「* (誰は) —田中が誰か」) という転位陰題による説明は、ヒリモトゥ語では *daika be* が文法的に可能で適用できないからである。

ゆえに、「…*ese*+疑問詞」が成立しない理由は、*ese* と疑問詞とが意味論的な排除関係にあるからであるが、その理由は明らかでない。文法的に「が」は主格および対象語格を表すとされるのに対し、*ese* は主格ではなく (主格に該当するのは辞順における *s-* である) 行為者を示すマーカーであることがまず考慮されなければならない。ただし、その拘束に対し、すでに述べたような新しい傾向が現れてきたのは、意味論的要請よりむしろ行為者そのものに重点を置いて表現しようとする語用論的な欲求と無関係ではないと考えられる。

最後に、KWIC 資料による網羅的調査の結果、*be*, *ese* の形態素配列は次のような

階層をなすことが判明した。

<i>be</i> (topic marker)	+ sVo
<i>ese</i> (actor marker)	
Ø (object marker)	
locatives, adverbs, clauses, etc.	

付 記

本論文は、平成5年度科学研究費補助金総合研究（A）『言語の機能と類型に関する総合的研究』（研究代表者：柴谷方良神戸大学文学部教授・民博研究協力者）の研究成果報告として提出した原稿を補訂し、加筆したものである。本研究を行う機会を与えられた柴谷教授、また本草稿を査読しいくつかの問題点を指摘された友枝啓泰教授（民博）に深く感謝したい。

文 献

- BAURE, J.
1978 *Hiri Motu for Beginners*. Waigani: Department of Language, The University of Papua New Guinea. (1984年度、パプアニューギニア大学学芸学部 J. Baure 講師の「ヒリモット語」コースでの教材)
- BELSHAW, C. S.
1957 *The Great Village, the Economic and Social Welfare of Hanuabada, an Urban Community in Papua*. London: Routledge & Kegan Paul.
- CAPELL, A.
1976 General Picture of Austronesian Languages, New Guinea Area. In S. A. Wurm (ed.), *New Guinea Area Languages and Language Study, vol. 2, Austronesian Languages, Pacific Linguistics*, C-39: 5-52.
- DUTTON, T. E. and C. L. VOORHOEVE
1974 *Beginning Hiri Motu*. *Pacific Linguistics*, D-24, Canberra: The Australian National University.
- 佐治圭三
1992 「構文——主語・主題・述語等——」 玉村文郎編『日本語学を学ぶ人のために』世界思想社, pp. 23-51.
- 崎山 理
1986 「オーストロネシア語族とパプア諸語の言語接触——とくに語順変化について——」『国立民族学博物館研究報告』11(2): 355-382.
1992a 「ヒリモット語」 亀井 孝他編『言語学大辞典』第3巻 三省堂, pp. 565-566.
1992b 「モット語」 亀井 孝他編『言語学大辞典』第4巻 三省堂, pp. 460-463.
1993 「モット語」 綾部恒雄監修・信濃毎日新聞社編『世界の民・光と影』下巻 明石書店, pp. 37-45.
- THE SUMMER INSTITUTE OF LINGUISTICS
1962 *A Dictionary of Police Motu*. Ukarumpa.

THOMASON S. G. and T. KAUFMAN

1988 *Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics*. Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press.

WURM, S. A.

1964 Motu and Police Motu, a Study in Typological Contrasts. *Pacific Linguistics*, A-4: 19-41.

WURM, S. A. and J. B. HARRIS

1963 *Police Motu: An Introduction to the Trade Language of Papua (New Guinea) for Anthropologists and Other Fieldworkers*. *Pacific Linguistics*, B-1, Canberra: The Australian National University.